

演題番号：A6

管内一酪農場における乳房炎対策

○森内誠子¹⁾，徳永 到²⁾

¹⁾ 三重県南勢家保 ²⁾ 三重県中央家保

1. はじめに：管内酪農場にて、乳房炎対策を検討した。(1) 農場概要：搾乳牛約30頭規模。畜舎は対尻式つなぎ牛舎、後継牛は全て自家産である。(2) 発生概要と対策の検討：令和3年8月、乳房炎検査で7頭中3頭から黄色ブドウ球菌(以下SA)が分離された。検査の結果を受け、SAの感染予防対策として、SA感染牛の搾乳順変更、潜在性乳房炎牛の早期乾乳と乾乳期治療の実施、臨床型乳房炎牛の盲乳・淘汰の検討を提案。しかし、当農場は泌乳量、牛の性格、BLVの感染状況等を考慮して牛を並べており、並べ替えは難しかった。また、農場主は出荷乳量の減少を危惧し、早期乾乳に前向きではなかった。さらに、後継牛をすべて自家産で更新しているため、SA感染牛の優先的淘汰は難しかった。農場主は農場で取り組める感染防止対策に限界を感じていたため、令和3年9月上旬より乳房炎ワクチン接種を開始した。

2. 材料および方法：乳房炎ワクチンはSA、大腸菌群、コアグラゼ陰性ブドウ球菌(以下CNS)による乳房炎症状を軽減する多価不活化ワクチンである。当農場では、泌乳ステージに関係なく全頭に一斉接種を実施、1回目接種を0日目とし、2回目を30日目、3回目を60日目に接種し、その後は90日

毎に追加接種した。ワクチン接種では細菌感染を防げないこと、ワクチンの効果が期待できない乳房炎原因菌の存在を説明し、搾乳衛生の重要性を再確認の上、搾乳手技確認と1、2回目のワクチン接種後、2回の乳房炎全頭検査を実施した。

3. 結果：2回の乳房炎全頭検査では、全27頭中SA分離率は11%から14.8%に増加、CNS分離率は74%から52%、連鎖球菌様菌分離率は70%から52%に減少した。また、ワクチン未接種の令和2年とワクチン接種後の令和3年で、バルク乳検査の平均体細胞数を比べると9月は70.6%、10月は58.6%減少した。同じく1頭1日当たりの乳量を比べると9月は19.1%、10月は19.8%上昇した。

4. 考察：CNS保菌率減少はワクチン接種と衛生指導の効果、SA保菌牛増加はSA潜在性乳房炎牛の間欠的排菌の影響と推察される。乳房炎原因菌保菌率の減少により、バルク乳検査の体細胞数は減少、出荷乳量は増加したと考えられる。農場主の乳房炎対策への意識が改善し、連鎖球菌様菌保菌率が減少したと考えられる。今後も対策を継続する。